子供の肺炎について

醫學士　石塚保吉

肺炎は、子供には隨分多い病氣である、殊に此頃は大分多いやうである。肺炎の中にも二通りの區別がある。一つはクルップ性で他の一つはカタル性である。クルップ性のは數も少く危險も少ないが、カタル性のは非常に數も多く、危險もまた多いやうである。

カタル性肺炎は、風邪が進んで肺を犯したもので大人よりは子供に多い病氣である。子供の中でも小さいほど多くて危險である。風邪が此病氣の原因であるから、風邪位と侮つて打ちすてゝおかぬやうに風邪の時に十分に注意せねばならぬ。風邪をひいた時はなるべく早く醫者の治療を受けるがよい、風邪をひいた時に入浴をさせたり、外をつれあるくなどは最わるい。厚着をさせたり、ゆたぽを入れたりするのが原因になる事もある。病氣の兆候は咳が出て熱が非常に高くなる、呼吸がせわしく脈搏がはげしくなつて非常に苦しむ、甚しいのは唇が紫色になる、此場合無論直に醫者に見せなければならぬがさしあたりの手當てとしては、濕布と吸入と室内の溫度を高める事との三つの大きな條件になつて居る。

濕布はやわらかい木綿のきれを三重か四重にたゝんで、冷水にひたしてかたくしぼつて胸にあて、その上に油紙をあて、ふらんねるをまくのである、熱の模樣によつて、二三時間毎に之を交換するのである。部屋の溫度を高める事は、注意して晝夜間斷なく、やらなければならぬ。夜の間に火が消えて、俄に溫度が下つた爲めに、折角なほ

りかけた病氣が再發したなどの例は少くない。いくら蒲團を多く着ても、その部屋の空氣が冷くては何の役にも立たぬのであるから、火鉢でも、ストーブでもたいて、よく室内の空氣をたゝめる事が必要である。但し溫めるだけでは空氣が乾燥するから、洗面器の中へ水を入れて其上におき、始終空氣の中に濕氣をもつやうにせねばならぬ。さうしてもまだ空氣が乾いて苦しいから吸入をやるのである。吸入は通例百倍の食鹽水か重曹水か、或はそれを兩方混合したものを用ゐる、三時間に一回位吸入器に附屬した杯に二杯位づゝやるのである。

ずつと重症になると以上の手當だけではとゞかなくなつてくる、平和の手段では快復がむづかしくなる。今にも陷らんとする危險を救はんが爲めに胸に芥子を塗るかまたは芥子の湯をつかはせる事がある。之れは一寸考へると殘酷のやうであるがこれによつて九死に一生を得た人が多くある。荒療治ではあるが、さういふ場合にはかはいさうだなどと云はずに、斷然敢行した方がよい、屹度助かるとは云へないが十中八九位は助かる。新らしい治療法で命が助かるのであるから、試むべき場合には、必ず斷行するがよろしい。

我園の郊外保育に就きて

神戸幼稚園保姆　佐藤ます

婦人と子供第十三卷第十一號に保育と自然知識と題して當市保育會計劃の博物講習に於ける一ケ年間細目を記載せられてより、近來各所に於て種々の議論起れりと聞く。元より其内容の如何は知